

かさいぜき さかづはいすいち
笠井堰と酒津配水池

かさいぜき くらしきさかづ たかはしがわ くらしきし ふなおちょう
笠井堰は、倉敷市酒津の高梁川にあり、倉敷市や船穂町などの
はたけ はこ と
田んぼや畑に水を運ぶための大切な水の取り入れ口です。



かさいぜき けんせつ

笠井堰の建設（12ヶ所の水の取り入れ口を一つに）



昔の高梁川の様子

(注) 堰 (せき)

川から水を取り入れるために、川の流をせきとめるしきりのことをいいます。

(注) 堤防 (ていぼう)

川の水が外にあふれないように高く盛られた部分のことで「土手」ともいいます。

この取り入れ口が残っていたのでは強い堤防になりません。そこで、この12ヶ所の取り入れ口もこの工事に併せて1ヶ所にするにしました。この取り入れ口は、大正14年に完成し、その時の岡山県知事であった笠井信一の名前をもらって「笠井堰」と呼ばれています。

(注)

笠井堰は、岡山県の3本の大きな川のうち、一番西にある高梁川の倉敷市酒津というところにあります。

その昔、高梁川は東と西に2本ありましたが、どちらの川も堤防が弱く、流れも悪かったために、たびたび堤防が壊れて、人が死んだり、家が流されたりする大きな被害が出て、たくさんの方が困っていました。

そこで、川の水を外に漏らさないようにするため、大きな堤防をつくり、2本あった川を1本にまとめる工事をすることにしました。また、2本の川には、東の高梁川に7箇所、西の高梁川に5箇所の農業のための水の取り入れ口がありました。

かさいぜきと 笠井堰から取られた水は、さかづはいすいち 酒津配水池を、くらしきし ふなおちよう 倉敷市や船穂町などの田んぼや畑（はたけ）（マスカットスタジアム約1100個分の広さ）に配られ、お米や野菜、果物を育てるために大切に使われています。

さかづはいすいち やくわり 酒津配水池の役割

ていぼう 堤防が強くなったことは良かったのですが、12箇所あった水の取り入れ口が一つになったことで、それぞれが取っていた水をどのようにして、今までと同じように配るかが問題になりました。

(注) 樋門（ひもん）
水を流したり止めたりするための仕切のことで、「樋」ともいいます。
幅や高さ、開く隙間を変えることで、流す水の量を調節することができます。



酒津配水池樋門



東西用水組合の事務所



酒津配水池

水に親しむ場所としても使われています。

そこで、かさいぜきと 笠井堰から取った水をいったん配水池にためて、この水を樋門から今までどおりに分けることにしました。樋門の高さは同じにし、幅を変えることで今までと同じ量の水を配れるようにしたわけです。こうしてできあがった配水池が「酒津配水池」と呼ばれています。

そしてこの配水池や樋門を管理し、水を仲良く分ける仕事をするため、東西用水組合という組織をつくりました。



トピックス

四季を彩る水辺の環境整備

酒津配水池の周辺は、以前から桜の名所として知られていました。そこで、古くなった水路や池の岸などを直すのにあわせて、遊歩道や橋などを新しくして、水辺に親しめる場所として整備しました。

さくら祭りのころ



桜の下のカモの群れ



春、酒津公園は、倉敷でも有数の花見どころとして、さくら祭りが開かれ、仲間や家族連れが、池や水路の周りに集まりにぎわいます。また、水路にはカモの姿も見られます。



七夕まつり

7月になると、七夕まつりが開かれ、たくさんの七夕飾りが水路に沿って飾られます。

みんなの願いが
かないますように



夏になると、水路は水遊び場に変身します。

子供たちのはしゃぐ声が、大きくひびきわたります。



水辺ではしゃぐ子供たち